

## 多様な動きを経験できる遊びの工夫実践例（縄を使つての実践例報告）

川西市立全幼稚園（9園）（兵庫県）

全校幼児数645名（男児338名 女児307名）  
（本事例に係る問合せ先）

電話番号 072（740）1254

メールアドレス kk1334@city.kawanishi.lg.jp

### 1 研究のねらい

「幼児期運動指針」に基づいた運動遊びの開発を目標とし、①「運動量を十分に確保すること」②「子供たちが夢中で取り組めること」③「そのために必要な指導者のマネジメント」の3点を視点として研究を進める。

### 2 研究の概要

運動神経回路形成のゴールデンエイジである幼児期において、多種多様な動きを取り入れ、かつ子供たちが運動に夢中になるための仕掛（時間の保障、場の設定、道具の工夫等）作り。

## ○実践プログラムの紹介

### □ 多様な動きを経験できる遊びの工夫実践例（縄を使つて）

全体が止まった状態での縄遊びは運動量が少なくなり、跳ぶことに飽きてしまう子がでてくる。そこで、二人組等複数で取り組むようにし、跳ぶところを見る、見られる場面を設定する。回数や距離の目標を設定することで、意欲や集中力を高めることができる。

① コーンを円形に並べる。子供たちは2～3人でチームになり、決められたコーンからトラックを一周する。戻ってきたら次の人と交代する。こうすることで、子供たちは、合図があるまで途切れることなく運動する意欲が持てる。指導者が一つひとつ指示をすることもない。初めは走り跳び、慣れてきたら後ろ回し前進みや片足1回旋2跳躍、1回旋1跳躍など状況に応じてレベルアップしていくことで、子どもの意欲を掻き立てる。

② フープの前で自分のできる技を5回跳ぶ。縄はフープの中に入れる。（失敗してもいい。カウントは続けて数える。1・2失敗→3・4・5。待ち時間の削減と子供の意欲を持続させるため）

5回跳び終わったら、コーンで待っている次の人とタッチをして交代。時間を設定して繰り返す。  
※縄遊びにおいて指導者が意識することは、子供たちの興味や意欲を高めることである。例えば、直線で跳ぶコース、走り跳びコースを作れば、運動量を確保し多人数での活動も可能となります。走り跳びは、縄を連続で回す練習となる。回して跳ぶ練習を最初に行うと、リズム良く跳べず1回1回途切れながら跳ぶ様子が多く見られる。最初から跳ぶのではなく、走る、歩く動作の中で連続で回す感覚を掴ませることを狙いとする。

## ○幼児の安全を確保するため配慮（工夫）したこと

準備運動の段階で、縄を使った遊びを多く取り入れる。例えば、縄を地面において多種多様なジャンプをする、縄をハンドル等にみたくて園庭を走る、基本的な縄の使い方を伝える等。遊びながら縄に親しむ機会をつくるなかで走るコースやルールを伝え、また友達を協力することを理解させる。

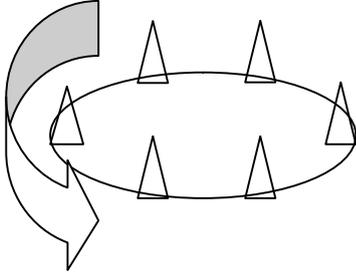
## ○成果の意義と今後の課題

手の動き、足の動き、それぞれ別の動きや違うタイミングが必要な縄遊びを実践することで、運動神経系を刺激することができる。子供たちが縄遊びに夢中になる仕掛作りをすることで、自主的に縄遊びを展開することができた。継続的に行えるカリキュラム作成が今後の課題である。

# ○ 研究内容

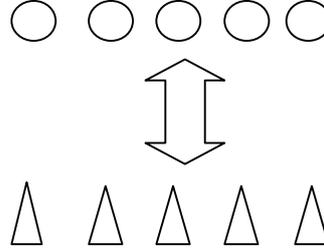
## 【歩いて、走って、縄遊び】

決められたコーンからトラックを一周する。戻ってきたら次の人と交代する。



## 【数えて縄遊び】

フープの前で自分のできる技を5回跳ぶ。終わったら、コーンで待っている次の人とタッチをして交代。



## 【縄を使って①：縄を落とさずこんにちは】

縄を頭から落とさないように動いて、友達にあつたら「こんにちは。」といってから握手をする。何人の友達と挨拶できるか。



## 【縄を使って②：フープを使ってしっぽ取り】

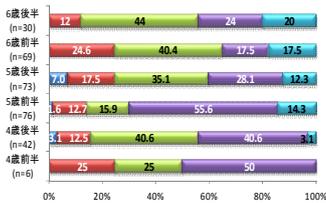
フープの中に入る人、フープを持つ人、しっぽをつける人、3人でチームを作り、他のチームのしっぽを取りに行く。取ったしっぽは自分たちのものになる。



## 【6種目体力測定結果】

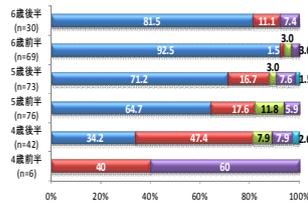
運動促進プログラム実施前後の体力測定結果

■ A判定 ■ B判定 ■ C判定 ■ D判定 ■ E判定

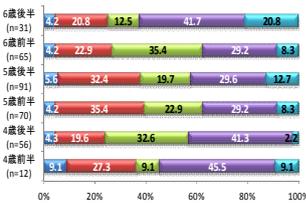


(運動指導前)

女兒における運動指導前後の総合判定の割合



(運動指導後)



(運動指導前)

男児における運動指導前後の総合判定の割合



(運動指導後)

運動プログラム実施後、A~C判定の割合が増加。特に女児の伸び率が目立った。運動量を確保することで、運動能力の向上が図られた。

D、E判定の園児の運動能力をいかにして向上させるかが今後の課題として捉えている。

## 【発達の特性に応じた遊びの実践】

発達に応じた体を動かす遊びを意識して保育に取り入れることの意義

発達の特性に応じた運動遊びを保育者が意識的に取り入れることで、運動神経系を大きく刺激できること、そして、運動遊びに夢中になる時間が確保できることが検証できた。また、異年齢や同年齢でかわる運動遊びに、励ましや作戦をたてる場を設定することで言語活動が生まれ、子供同士のコミュニケーション能力を育む機会となった。今後も「幼児期運動指針」にも基づき運動遊びの実践を重ねていく。